

めぐる植物のかたち



太平町での農作業（昭和40年頃撮影）多治見市図書館郷土資料室提供

暮らしへの植物利用

土地の資源を暮らしへと利用してきた実態は、農業と深く関わっています。稲や麦などは、食用に栽培された植物が二次的に屋根材として使用されてきました。そのため、植物素材の屋根は「くずや」と表現されることもあります。

稲わらは、屋根の勾配を滑らかにするのに適した形状と素材であることから、五峰庵の屋根の2層目にも使用されています。水に弱いため、屋根材としては一般的ではありませんが、その特性である「しまり」の良さから、直接雨があたらない棟の中心部分などに下地として使われることがあります。

お米作りと稲わら

縄文時代は、まだ、イネづくりがあまり行なわれていなかったため、ススキやヨシなどのやわらかい茎や葉を利用して、縄をなつたと考えられています。現代のような稲穂を根元から刈り取る「根刈り」の収穫の様子がはじめて記録に登場するのは、11世紀初頭（平安時代中期ごろ）に清少納言が書いた「枕草子」。この時代には、稲の「根刈り」が行なわれ、稲わらを活用する文化が各地に広がっていたとされます。その後、江戸時代になると、稲わらの文化が全盛期を迎えるようになりました。

多治見の農業と稲わら

農家がお米を収穫したあとの稲わらは、陶磁器の荷造り用に売却することで貴重な収入源となりました。また、兼業農家の場合、窯への出稼ぎが盛んに行われ、やきもののみならずでは地域性が農業に深く影響していました。

につくりさんの仕事



徳利の荷造り。市之倉地域で収集。

昭和30年代頃まで、陶磁器の荷造りには稲わらが使われていました。荷造りを専門とする職人は、「につくりさん」と呼ばれ、ハサミー丁を道具としてフリーランスで働き、招きに応じて陶器商へ出向いたといいます。荷造り用のわらは、根本や可見市の大森・姫治方面からリヤカー・荷車・荷馬車などに積んで運ばれてくることが多く、どの陶器商にも、100束か150束ずつわらが置いてありました。昭和15年、わらの購入に統制価格が定められ自由に購入することができなくなりますが、陶磁器の梱包材としての需要は継続し、わらを県外まで買い付けるようになります。幼少期に「につくりさん」の姿を近くで見ていた方への聞き取りによれば、陶器商では荷造りの「職人さんが来られる前に、お店の店主が“水をうつ”作業をおこない、荷造り用のわらの下ごしらえをしていました。この作業により、わらは「しんなりとして、紐のかわり」となりました。

しめなわ

天照大神が隠れた岩戸の入り口にかけていた「シリクメナワ」。しめなわは、「内」と「外」のような対立する2つの空間を分ける境界を示すものとして、古くから存在してきました。現在でも、地域の氏子たちが集まり、10月の例大祭に向けてしめなわづくりを行っている平和町にある多度神社。そして、甘原地域で栽培された「イセヒカリ」を使ってしめなわをつくる取り組みをしている御幸（みゆき）町にある新羅（しんら）神社。宮崎清『ものと人間の文化史 葉Ⅰ』によると、岐阜県東濃地方は、わらへの依存度が決して高くない地域ですが、わらがハレの日のための祭具・神具として果たしてきた役割を見てとることができます。



縄目に呪術的な力をこめる考えから生まれたしめなわ。多度神社のしめなわは「わら紙垂（しで）」も地域で手作り。



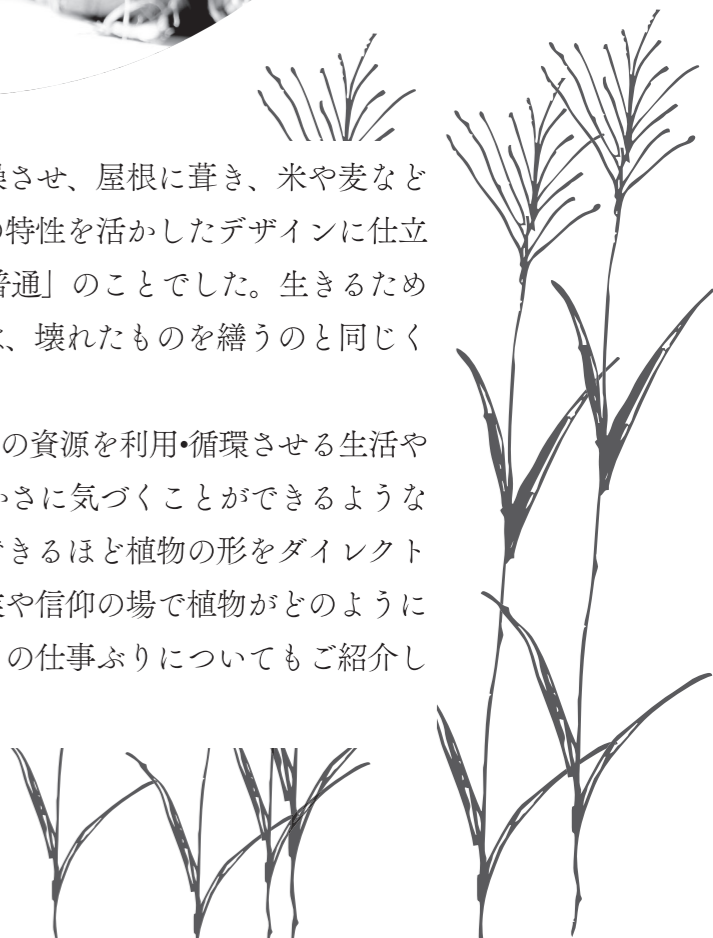
身近な土地に自生している植物を乾燥させ、屋根に葺き、米や麦など農業の営みの中で生まれる植物を、その特性を活かしたデザインに仕立てることが、今から100年ほど前は「普通」のことでした。生きるための毎日の中で、屋根を葺き替えることは、壊れたものを繕うのと同じくらい当たり前のことのひとつ。

本企画展で紹介しているものは、土地の資源を利用・循環させる生活や文化・造形に、改めて足を止め、その豊かさに気づくことができるような展示品ばかりです。素材を十分に想像できるほど植物の形をダイレクトに活かした素朴で美しいデザイン。産業や信仰の場で植物がどのように活かされてきたのか、それに携わる人々の仕事ぶりについてもご紹介します。

多治見市文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL <https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>

主要参考文献
『多治見市史』上・下 多治見市 1980年・1987年
小林梅次『日本の草屋根 伝承の技術を追って』1984年 相模書房
宮崎清『ものと人間の文化史 葉Ⅰ・Ⅱ』1985年 法政大学出版局
川島宙次『美しい日本の民家』1992年 ぎょうせい
柳沢直 等『萱（地域資源を活かす生活工芸双書）』2018年 農山漁村文化協会
安藤邦廣・上野弥智代・日本茅葺き文化協会・杉原バーバラ『日本茅葺き紀行』2019年 農山漁村文化協会
鈴木安一郎 安藤健浩『しめ飾り その造形とその技法』2019年 誠文堂新光社

謝辞（敬称略）
永保寺 新羅神社 多治見工業高等学校専攻科 多治見市図書館郷土資料室 長野県環境保全研究所 カヤネイチャービジネス 甘原ええのお 阿曾藍人 生田建治 板橋茂晴 岩井章 岩井立弥 大加清 大澤好喜 亀井正壽 坂崎二六生 坂崎そのこ 品田奉徳 高木典利 田澤佳子 谷敏 野中弘志 平林史孝 深谷滋浩 藤原拓馬 松田かよ子 若尾宏 若尾正成



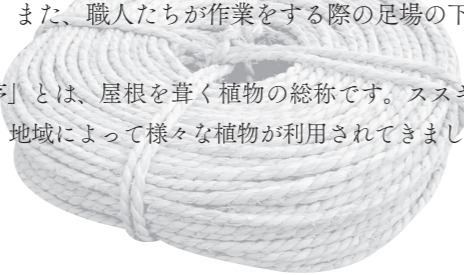
五峰庵の屋根を葺き替える

永保寺境内に佇む五峰庵（ごほうあん）は、木造入母屋造（いりもやづくり）、茅葺（かやぶき）の建築物です。明治38年から大正10年にかけて在任した無底老師（むていろうし）の居宅として建てられました。平成18年以来となる茅葺屋根の修理作業が令和5年12月から令和6年2月にかけて行われ、岐阜県高山市で茅葺等の仕事を専門とする職人を中心に屋根の全面葺き替えが行われました。



元々使用されていた古い屋根材を取り除き、再利用できる素材を選別。傷んでしまった垂木（たるき）の竹は取り除き、新しい竹を追加・補強していきます。この垂木が、茅（●1）を固定していくための大切な下地となり、また、職人たちが作業をする際の足場の下地になります。

●1「茅」とは、屋根を葺く植物の総称です。ススキ、ヨシ、稲わらや麦わらなど、地域によって様々な植物が利用されてきました。



軒先から棟にむかって、茅を葺き上げていきます。1層目に葺くのは化粧茅（けしょうがや）と呼ばれる手入れの行き届いた長いススキ。この茅は、修理作業完了後も、垂木に透けるように軒先から見える部分になります。隅付（すみづけ）から始まり、建物の周囲1周分を化粧茅で覆った後は、屋根の下地の竹材に沿わせるようにして、短いものから長いものまで、長さの異なる3種類の茅の束を交互に積み重ねながら葺いていきます。長さの異なる茅材を交互に重ねることで、葺いた屋根のラインが繊細に仕上がり、屋根としての強度が増す効果も期待できます。2層目に葺かれた短い茅は稲わらで、高山市で栽培されたものが使用されました。稲わらはススキよりも滑りにくく、穂先の厚みが薄いため、屋根の勾配を滑らかにするのに適した形状と素材です。根元に厚みがあるため、雨水の水切れを良くしてくれる効果もあります。

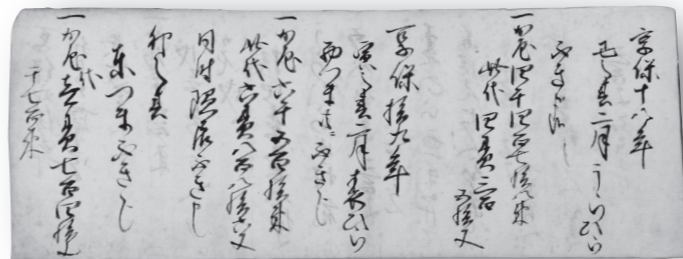
3層目以降は、屋根の上に並べらえた茅を竹で上から押さえ、体重をしっかりとかけ、針金でつく下地に固定します。

また、基準となる隅（すみ）の傾斜・平面の角度を美しく計算しながら、「かんぎ」と呼ばれる道具を使用して茅材を叩きそろえていきます。「かんぎ」はハンドル部分の長さや、溝の形状、使用する木材の種類がそれぞれに異なり、使用する場所や揃え方にあわせて、職人による自作のものが使用されます。

最終的な屋根の造形をかたちづくる刈り込み作業。手刈りの部分には良く研がれたハサミが使用されます。「茅葺屋根にしては小さめで、下地の勾配が4面とも異なる。そのアンバランスさを茅の量で調整するのが難しい。」と職人が語る五峰庵。美しいラインを出すために、繊細な調整が行われます。



多治見周辺エリア、茅葺屋根をめぐる暮らし



東家文書「東弥右衛門孝常諸事覚帳」
多治見市図書館郷土資料室所蔵

民家の新築や改築・修理などの建築工事（普請・ふしん）に際しての、相互扶助的な労働力や物品の提供、職人への支払い、購入材料などを記録した資料は「普請帳」と呼ばれます。欠築村（かけやなむら・現在の東栄町）の庄屋、東弥右衛門の家に関する普請帳をみると、享保18年（1733）に始まった家屋の屋根葺替について、母屋の表側と西のつまに一年、裏側に一年、東のつまに一年と、8年におよぶ様子が記されています。庄屋の家というだけあって家の規模は大きく、茅の使用量は、母屋の裏側に4,478束、表側と西のつまに6,510束、東のつまに1,700束が使われています。普請帳には、「萱（かや）は買入れて残り手前山に有」とも記されており、購入分のほかに自生の植物も刈り取って使用していたことがわかります。この時代から既に多治見エリアでは、屋根材を地域の植物でまかなうだけでなく、購入していたことから、茅材が貴重であったことが推測できます。



左 北小木全景 昭和4年
多治見市図書館郷土資料室提供

右 根本町での屋根葺き
根本愛郷会提供

植物屋根の歴史をたどると、時代とともに家屋の戸数増加に伴って屋根材に使用する植物が不足してくる中で、稲わらや麦わらだけで屋根を葺く家が現れるようになります。稲わらや麦わらの屋根材としての耐久年数はススキと比較すると短く、葺替のサイクルが早くなります。そのため、村を挙げての草屋根葺きという相互扶助構造が崩れてゆき、屋根葺きを職能とする職人たちが生まれます。生活技術として村人すべてに共有されていた屋根葺きの技術は、専門の職人たちを核とした人びとによって展開されていくようになりました。

多治見市内を中心に行った聞き取り調査によると、昭和10年から20年頃の大畑地域では笠原川沿いで採取したススキと住まいの周辺で収穫した麦のわらを混合で屋根に葺き、8年程度で葺き替えをおこなっていました。また、昭和20年から30年頃の根本地域では稲の収穫を終えた後に栽培する麦のわらを主に屋根材に使い、5年から10年おきに葺き替えを行っていました。屋根に使用される麦のわらは“むいっから”と呼ばれていました。根本地域と同様に、北小木地域や甘原地域、小泉地域・姫地域でも民家の屋根は麦わらで葺かれていました。

屋根葺きに使われる「茅」が野菜に、やきものに



屋根葺き材に使う材料として、ススキを代表とするイネ科植物を使う理由としては、枯れても強度が十分であり、耐水性があって腐りにくいことが挙げられます。屋根葺きに使われるススキやヨシなどが揃ってイネ科であるのは、他の植物に比べてシリカ含有量が多く、頑健な稈（かん・茎のこと）を持つためです。中でもススキはシリカ含有量が約10%と高く、物理的強度も腐食に対する耐性も高いため、優秀な屋根葺き材であるといえます。ススキについて、植物生態学を専門とする岐阜県森林文化アカデミー教授の柳沢直氏は著書の中で、「元をたどればアフリカ大陸の乾燥した気候のもと、草食動物に食べられないよう防御するために進化してきたイネ科の植物であるが、分布を広げていった先の日本列島の高温多雨で多湿な環境で、雨をしのぐための屋根葺き材として使われることになるとは、何とも面白い巡り合わせであると思う。（●2）」と述べています。屋根材として選択される植物が、人間の営みとともに進化・共存してきたことは大変興味深い点です。●2 柳沢直 共著『萱（地域資源を活かす生活工芸双書）』

五峰庵で使用されていた古い茅材や、刈り込みででた茅の破片は、その一部が、畑の肥料として再利用されました。また、乾燥した植物は燃焼性が高く、古くから生活の中で燃料として利用されてきましたが、今企画展では、陶芸家の阿曾藍人氏と多治見工業高校専攻科にご協力いただき、作品を野焼き焼成する際の燃料として五峰庵で使用されていた古い茅材を利用していただきました。多治見という土地ならではの茅材のめぐり方から生まれた作品。焼き色の力強さが作品の造形を効果的に演出してくれました。